

森林経営原論序説

箕輪光博 (東京農大)

要旨: 本報告の意図は、森林経営および林業経営にかかわる三つの学説を取りあげ、価値、資本などの観点から原論レベルでの特徴を見ることにある。考察を通じて、三つの学説それぞれの、価値に対する対処の仕方と資本のつかみ方、および森林経営の形の違いが明らかになった。

キーワード: 価値、資本、経営学説

I はじめに—今なぜ森林経営原論か

近年、自然資本や社会的共通資本を重視する傾向と同時に、スギ材の集成材生産化などの新しい近代化・工業化への動きが見られるようになった。近代工業技術は、自然価値や空間価値を無視もしくは軽視し、それらを交換価値にのみに転換・貯蔵することを大きな特徴としており、森林経営技術とは相容れない部分が多い。持続可能な森林経営の視点から見たとき、両技術はどのような関係に立つのか、さらに、経営面から見たとき、維持すべき価値や資本をどう考えるべきなのか、森林経営原論の必要な所以はまさしくそこにある。

II 森林経営と空間価値

森林経営の生み出す価値には、通常、使用価値と交換価値の二つの側面がある。前者には、経営者の山造りに対する理想や思い、その場所の匂いが色濃く付着しており、その価値を享受する側もその「製作性・作品性」を感得することができる。これに対して、後者は市場を介して実現する価値であり、消費者にとってそれは単なる商品に過ぎない。換言すれば、前者では空間的差異がその固有性を示すものとして働いているが、後者はそのような固有性を消去する方向に動く。交換価値は自己増殖的であり、数学的に表現すれば、時間軸上で複利型・指数型の成長に対応する。それを可能にするのは、資本の収益力とそれから生み出される利潤である。その意味では、交換価値は「時間価値」の体现者といえることができる。

ところで、価値という観点から見ると、森林経営は、本来、自然資本としての森林ストック (Growing Stock) を基盤に毎年一定量の使用価値を引き出す再生産型のシステムである。特に、作業級という空間組織をベースとする皆伐作業や択伐作業には、輪伐期または回帰年という形で時間概念が場所に埋め込まれ、資源の世代間配分を企図するメカニズムが備わっている。この場合、森林経営は、「空間価値」の体现者であると表現した方が理

に適っている。ここで、空間価値とは、次のような内容を指している(1)。

「空間価値を規定する根本は、土地がわれわれの生活する場所であり、生活空間配置の基盤だということであり、空間利用の相互関係であり、空間利用の方法であり、土地ないし空間をとりまく外的条件である。これらのことは、空間価値の形成が他の商品と比べて社会的性格の強いことを示している。」

森林経営の任務の第一は、最良な空間価値の形成とその保続的利用にあると言っても過言ではない。

III 資本のつかみ方および経営学説の意味

「持続可能な森林経営」における論点の一つは、「持続」の源泉である資本をどうつかむかである。土地の価値を無視する採取資本や逆に土地のみを資本とみる立場には、伐採と更新を同時的かつ統合的にとらえる計画的・持続的視点が欠如している。換言すれば、上記の意味での空間価値を維持・実現する新しい資本概念が必要である。その一例が宇沢弘文氏の「社会的共通資本」(2)であろう。そこで、三つの経営学説を取り上げ、資本概念の変遷を見ておきたい。

土地純収益説では、個々の土地を永続的に間断収益(フロー)を生み出すストックとみなし、所与の林業利率 p を用いて土地資本価を収益還元価として求める。その場合、森林は土地及び立木の和および林分の和に分解されている。これに対して、森林純収益説は、森林全体(ストック)からの連年純収益(フロー)を考える。ここでの資本は、敢えて言えば、林木蓄積資本であり、その評価は古典的な森林評価方式を介して行われる。他方、平田説は、森林純収益説における経営としての資本概念の欠如に着目し、林業経営の資本を“現在の森林生産力の再生産費”と定義する(3)。すなわち、面積 F の森林(皆伐・人工林)を対象に、森林生産力を uv 、森林資本を $K=uk$ として求めている。ここで、 v 、 k はそれぞれ年平均伐採量、年費用(伐出費+育林費)である。ま

た、 u は、平均年伐面積 f と森林面積 T から $u=T/f$ として計算される。平田説の独創的な点は、森林生産力を立木次元ではなく丸太次元で把握し、また資本を収益ではなく費用面から年費用の u 倍ととらえた点にある。従来の輪伐期に相当する u は資本還元という重要な役割（土地純収益説における p の役割）を果たしている。

ここで、上記の三学説の意義を考えてみたい。学説は、ある観点から、森林経営もしくは林業経営を捉えたものであり、それにはモデル化、抽象化という学問特有の簡素化過程が必然的に伴っている。土地純収益説は、収益の源泉を土地という資本（Stock）の成長力と貨幣資本（Capital）の収益力に求めており、工業システムに自然システムを強制的に随伴させようとする思考が見てとれる。そのような考え方のもう一つの例が、「指率」という概念である。これは、林分の伐採時期をきめるにあたって、資本側の成長率 p と自然側の成長率 z を比較して後者が前者を下回った時点で伐採するという考え方であるが、これに対して、ドイツの当時のフォレスターの間から、「森林は銀行における貨幣の如く成長しない」という批判が出されたという。おそらく、芸術的制作に近い感覚で森林の経営もしくは森林施業に携わっているフォレスターから見れば、時間軸上で自己増殖する交換価値次元をベースとする発想に異を唱えなくなったのは当然であろう。その点からすると、森林純収益説には、法正林という仮定的前提があるにせよ、保続原則や作業級という空間概念に支えられて、空間価値を積極的に創出・維持していこうとする制作的意図が見える。また、そこに内包されている時間概念は、自己増殖を旨とする直線の時間ではなく、作業級全体に埋め込まれた循環型の時間である。さらに、平田の理論は、この輪伐期 u を引き受けて、かつ森林純収益説が看過した商品（丸太）生産の面を組み込み、永続的・連年生産型の林業経営論を展開した。ここでは、交換価値を連年生み出す資本概念の創出と木材価格の評価法がポイントである。価値論的には、制作的側面と商品的（交換価値的）側面を統一しようとした試みと解釈できる。以上の三学説の他に、恒続林思想や択伐施業論も、技術と自然、人間が一体となった制作的森林経営を標榜するものとして他の分野に誇れるものである。

Ⅳ おわりに

最後に、森林経営の形という面から一言付言したい。土地純収益説は時間軸上の「成長論」（利率 p の世界）なので、空間における「形相」面が欠如している。之に対して、森林純収益説は、林木蓄積（Growing Stock）についての形（法正林の世界）を有するが、その形式性に難がある。平田説は、 p を拒否し、その代わりに輪伐期 u を保存しつつ、資本（Capital）の案出を通して林

業経営の新しい形を求めたが、Growing Stock面での形が消えている。今、より包括的・統合的な森林経営・林業経営の形が求められている。

引用文献

- (1) 早川和男：空間価値論，勁草書房，東京，1973
- (2) 宇沢弘文：社会的共通資本，岩波書店，東京，2000
- (3) 平田種男：林業経営原論，地球社，東京，1983